

Title	服部文四郎著 銀行原論
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1914
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.8, No.9 (1914. 11) ,p.1227(133)-
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19141100-0133

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

驅逐され銀貨に先ちて貯藏さるるに至る。ペグビー氏の意見によれば一旦貯藏せられたる金は以前の銀貨に於けるが如く容易に解放せらるることなしと云ふ。又以てルービー銀貨に對する信用の一部分の失墜したるを見るべし。『近時再び大規模に貯藏の行はるるに至りしは統計の示す所なり』

ルービー銀貨が其他凡ての定位貨幣の如く其の數量の制限によりてのみ其名目價格を保ち得るものなることは吾人の記憶をする所なり。印度に於てはルービー銀貨の自由鑄造を停止してより以後七年間は殆んど全くルービーを増鑄せしとなしと云ふを得可し。而して是が爲めに誘致せられたる流貨の缺乏は多少土人の貯藏せるルービーの解放及外國より再輸入によりて補はれたり。而かも、かかる補充の途ある間は流通高の制限は充分其效力を發揮することを得ざりき。即ちルービー銀貨は英貨一志四片なる其名

目價格を維持する能はずして一時一志一片に迄下落したり。千八百九十八年銀貨の爲替相場の確定するに至りし以後通貨缺乏して取引上困難を來し且つ金融切迫するに至りしかば政府は新たにルービー銀貨を鑄造し之を流通せしめたり千九百年以後に於ける是等の發行高は非常に多額に上りしも、一九〇七八年の恐慌の年を除けば、ルービー銀貨の爲替相場を動搖せしむる程度には達せざりき。

茲に注意を要するはルービー銀貨の鑄造高を決するは(一)倫敦へ送金するに要する額、(二)印度に於てルービー銀と引換の爲めに提出する金の額、及び、(三)政府が印度に於ける取引及銀行業に必要なりと認めたる概算高によるものなること之なり。(未完)

批評と紹介

服部文四郎著『銀行原論』

大正三年 六月東京同文館發行
菊判一〇四二頁並附錄定價金參圓

本書は銀行論專攻者なる早稻田大學教授服部ドクトルの著述に係る頗る有用なる新刊物なり。著者は銀行に關する研究を銀行原論、銀行政策論並に銀行經營論の三部に分ち、原論に於ては銀行に關する國民經濟上の原理を究め政策論に於ては銀行に對する國家政策を論議し經營論に於ては銀行業者の執る可き營業方針を述べんとす。本書は即ち此第一部に關する著者の研究を載するものなり。されど、本書の收むる所は單に銀行に關する原則のみに非ずして、間々政策並に經營方針に論及せる所あり。

著者は銀行の性質を最も廣義に解し之を定義して曰く『銀行とは自己の計算を以て一方より信用を受け之を他方に與ふるを業とする企業なり』と。著者は此定義中の文字を詳解せる後、銀行の發達を略述し、銀行の効用、銀行の種類等を説明し、進んで叙上の廣義の定義を標準として、預金、紙幣の

第八卷 (二二二七) 批評と紹介

發行、債權の發行、割引、貸付を細論し、轉じて取立並に支拂、兩替地金銀買賣、保護預り、有價證券の引受並買賣、信託業務等に論及し、最後に爲替を細論せり。猶ほ巻尾には金融統計を參考書表とを一纏に掲出して讀者の便宜を計りたり。

以上諸項中に於て銀行の効用に關する一章、小切手に關する一節、割引歩合を論ずる數節並に最尾の爲替論の一章は益し著者が最も努力せるものなる可し。吾人は他日本書を精讀するの機會を得ば此數節の要旨を紹介すると同時に聊か論評を加ふるこゝある可し。

全巻を通じて説明並に簡明にして行文平易、加ふるに印刷鮮明、且つ誤植少なきが如し。吾人は著者が本書の如き有益なる大部の著述を完成せるを祝し、其姉妹篇が一日も早く發刊せらるるに至らんことを祈る。

小林丑三郎著『日本財政論』

大正三年九月東京隆文館發行
菊版三八四頁定價壹圓九十錢

本書は近年に於ける我國の財政の發達並に其現狀を説き且つ之に論評を加へたるものにして、本邦財政の大綱に通ぜんことを欲するものには好參考書なり。全巻を分ちて、第一編豫算制度、第二編經費制度、第三編收入制度、第四編收入各論とし、

第九號 一三三